ホッカイダーへ贈ろう！道産子の美学

宗谷医師会
西岡整形外科クリニック　西岡健吾（にしおかけんご）

10年来、私は宗谷地区の医報通信員を担当してきたが、ついにこの春お役御免となった。これまでの私の投稿は、警察署に乗り込んでクレームを付けた話や、法廷でモンスタークレーマーとやり合った話だったりと、陰惨で殺伐とした内容が多かったので、せめて最後はハートフルな内容で締めたいと思う。

2020年、夏休みを利用して、斜里岳ソロ登山を計画したときのこと。前日に近場でソロキャンプし、翌朝登山口に向かった。お盆時期で登山口にはたくさんの車が置いてあり、およそ半分は“わナンバー”のレンタカーで、コロナ禍最初の夏、都会の密を避け遠くから来ていることを想像した。

登山開始して５分、同じタイミングで近くを歩いていた、背の高い男性二人組に挨拶した。２人とも帽子にマスクにサングラスと、都会だと物騒な恰好だが、晴天のコロナ禍なので仕方ない。最初は軽く会釈程度で「地元の方ですか？」と聞かれたので「ええまあ、一応道産子です」と答えた。聞けば２人組は、会社の夏休みを利用して関東から自家用車とフェリーで来たという。しかも何と昨日旭岳に登り、そのまま斜里岳に向かい近場のキャンプ場泊、つまり二日連続の山行とのこと。２人とも20代後半とのことで、さすが若くて元気である。見た目はコンビニ強盗風だが、大学の同級生だという二人組の会話内容が、端的に言って上品であり、我々口さがない道産子との差を感じた。私も年齢を聞かれたので「もう46になります。子供６人いますが全員山登りは絶対嫌だと」と答えると「えー！俺らよりちょっと上くらいかと」と驚かれた、ことに気を良くしたわけでもないが、互いに斜里岳は初めてということで意気投合し、私はこの二人組と一緒に登山することになった。さて、斜里岳は登りと下りで別ルートを取ることが可能で、しかもちょっとした渡渉（沢登り）ルートもあり、景色と道のりの変化を最後まで楽しめる。斜里岳初登山の三人組は、それなりの社会的距離を保ちつつ、私が道を間違えて迷いそうになったとき、若者がスマホのナビを駆使して正しい道に戻してくれたり、途中若者の一人が頂上手前で水を切らし、軽く熱中症気味だったので、私の水を分けてあげたりと、お互いに助け合いながら無事登頂を果たした。下りでは一人登山だと往々にして飽きがきて、心の中で自問自答しながらの下山となるのだが、若者の「自分がいかに北海道を愛しているか」の話が面白く、退屈せず歩けた。さてゴールの登山口まであと30分の山道で、若者が歩きスマホで周辺の宿を検索していた。本州の人は歩きスマホは山道でも余裕なのかと感心したが、若者は「さすがにテント泊二日連続はキツイからホテル探したけど、お盆時期だからこの辺どこも高いな。やっぱりテントにするか」それを聞いて、私は密かに決心した。

そして無事、三人一緒に登山口に到着した。このご時勢でも見知らぬ若者達と登山を楽しめたことに感謝し、三人で記念写真を撮った（**写真１**）。そして私は、彼らに１万円を差し出した。「お陰で楽しい登山になったからお礼です。ホテルに泊まる足しにしてください。二日連続の登山で疲れてるから、今日くらいはゆっくりホテルで休みなさい」と言って、恐縮する彼らに強引に手渡した。

別れ際に、彼らの愛車を見せてもらった（**写真２**）。筋金入りのホッカイダーであり、道産子以上に北海道を愛し憧れていることがよくわかる車だった。せっかくなので最後に連絡先を交換し、そのうちまた一緒に登ってみたいとも一瞬思ったが、やめた。お金を渡し連絡先まで交換するのは無粋というものである。北海道を愛してやまない自分達に、名も知らない道産子が親切にしてくれた、その思い出が彼らに残ればそれで良い。ホッカイダーへ贈る、道産子の美学である。

（写真１）真ん中が私で、両脇が若者達

（写真２）若者の愛車。バイクも積んで、毎年北海道に来ているらしい